

琴の葉

森野 水琴

「語り部を呼べ」と全能の神ゼウスが仰せられた。たちまちのうちに死して天上に召された語り部たちが集まった。ゼウスは次のように仰せられた。

「今、人間界の言葉は乱れている。自らのおごりのせいで乱れている。その昔、人間たちが天にも届けとバベルの塔を建てた時、余は人間たちの言葉をバラバラにして、何を言っているのか分からないようにした。その後、人間は文字を發明したのだが、自分たちに都合の良い事だけが記された。文字が發明された時に、余はそなたら語り部を隠れさせた。口封じのため絶滅されるのを恐れていたことだ。何代にも渡って、そなたらの子孫に伝えられている。今こそ乱れた言葉を何とかさせよ。なお文豪には別途指示するので、文豪の生まれ変わりたちとも力を合わせるがいい。」

これを受けて語り部たちは、それぞれの生まれ故郷に合図を送った。長い間、口伝で受け継がれた祈りが始まった。

大学の同級生Aが下宿に訪ねてきた。Aは語り部の子孫なのだとのこと。Aの父も語り部の子孫なのだがAの母との平凡な暮らしを選んだらしい。語り部の子孫の組織は見張り役にBを選び、Aが一人暮らしするのを待っていた。

昨日BがAの下宿を訪ね、土曜日に組織の本部に同行するよう告げた。語り部の子孫として研修を受けるか否か面談するらしい。研修を受けない場合は子孫を残すための実習があるという。どちらにしても詳細な内容は秘密にしなければならぬのだが、今後様子が変だと思ったら、研修か実習のせいだと理解してもらいたいというのが訪問の趣旨である。

週明けの月曜日にAを見かけたが、何も変わった風には見えない。

見張り役のBが私の下宿に訪ねてきた。私も語り部の子孫なのだとのこと。私の父も母との平凡な暮らしを選んだようだ。Bは私が一人暮らしするのを待っていた。Bは土曜日に下宿に迎えに来るので、組織の本部に同行するよう告げた。何があるか分からないが、取り急ぎメールしておく。

というのがCからのメールである。AもCも私も同級生である。Cは私が小説投稿サイトに投稿しているのを知っているので、万一の事を考えて私にメールしたらしい。

これを投稿するのはBが私の下宿に訪ねてきたからである。私も土曜日に本部に同行することになった。

Bが迎えに来る前に投稿しておこう。

Bが車で迎えに来た。車に乗ると目隠しをされた。本部の場所を知られないようにするためらしい。

本部に着くと、目隠しを外され、面談室に案内された。語り部の子孫として研修を受けることにした。毎週土曜日にBと車で通うことになる。研修のオリエンテーションを兼ねて、研修所に案内された。

研修生の中には、AもCも居なかった。どうやら実習の方を選んだらしい。鉢から木の枝を二本選び、研修に加わった。木の葉をこすり合わせて音を出す。それで会話しているらしい。

文字だとほかの組織の者にも知られてしまうため、このような方式で伝えられているとのこと。文字が日本に伝わってきた時に、語り部たちの一部は、口封じされるのを逃れて、各地に散らばり、地域に溶け込んでいった。

研修所には、木の葉の奏でる音だけが響いているのだが、少しずつ理解できるようになった。ただし内容を口外することは禁じられている。

気長に通うことにして、Bと帰路についた。

研修所に通うようになって一年経った。

ある程度の音は理解できるようになったので、月に一度、森で研修することになった。

近隣の研修所との合同研修である。一斉に木の葉を奏でる様は壮観で、音も心地いい。

所在地を秘密にするという条件で、自由に森に出入りしてよいとのことである。ただし私語は厳禁である。

翌年の一月二日。新年の合同研修が森で行われ、私も参加した。一斉に木の葉を奏でるのが新年だけあって一層おごそかな気持ちになる。

文豪の生まれ変わりたちも見学している。よく見ると女性が一人。私たちには見えるのだが、天上の紫式部の分身とのことであった。

いよいよ天上も本格的に動き出したようである。

二月の合同研修も紫式部の分身が見学している。

研修の冒頭、しばし風が奏でるささやきを傾聴した。

傾聴することで心が研ぎ澄まされていく。

ささやきに背中を押されて、実りある研修になっていく。

森を訪れるたびに冒頭は風のささやきを傾聴するようにとのことである。

回を重ねて次第にささやきの意味することが分かってきたように思われるが、同じささやきは無い。一期一会のささやきである。

春の合同研修は、おだやかな日差しに見守られているような感じで心地よい。

一同なごやかに木の葉を奏でていく。

今回から踊り手も加わっている。

木の葉の奏でる音にあわせて舞う様は天にも届けと言わんばかりである。

音に舞い、舞に酔っていく。

夏の合同研修は、森に隣接した野原で照りつける日差しに汗して行われている。

木の葉を奏でる熱気が伝わってくる。

踊り手も汗を拭いもせず舞い続ける。

研修を終え、一同森林浴を満喫していた。